大障教ニュース

大阪府立障害児学校教職員組合
大阪市天王寺区東高津町7-11
府教育会館704号
TEL 06-6765-8904
FAX 06-6765-8905

弱点や未熟さのなかにこそ人間らしい営みがある

子どもの実態や願いから出発した教育を

大障教 新転任者歓迎教研

4月29日（土）、大障教・新転任歓迎教研が大阪府教育会館で開催され、約50人が参加しました。三木裕和さん（立命館大学教授）が「『無念』が時代をこじ開ける～障害のある子どもたちと出会って～」と題して講演し、教師論、教育課程論、授業論について、エピソードを交えながらわかりやすく語りました。

「私は教師に向いていない」

三木さんは30年以上特別支援学校の教員養成に携わってきました。4回生になり「私は教師に向いていない」とあきらめる学生がいると三木さんは言います。その学生たちはどちらかと言うと控えめ、判断に迷う、大きな声が出せないタイプ。しかし三木さんは「惜しいなあ。絶対いい先生になるのになあ」「この先生を好きな子どもたちがきっとなるのになあ」とずっと思っていました。

担任した子どもとのエピソードを語る三木さん

2013年の安倍政権・教育再生実行会議の提言には、「教師は困難にも自ら進んで立ち向かい、学び、成長し続ける」とあります。三木さんは「この勇ましい教師論が内面化してはいないか」と問いかけます。「いろんな先生がいて学校が成り立つ。元気で、前向きな先生ばかりだったら子どもは息苦しい。先生たちには、よく失敗をする、優柔不断など自分の性格を否定しないでほしいのです。なぜなら自分を否定したらそれは子どもの弱さを見捨てることにつながる。弱点や未熟さのなかにこそ人間らしい営みがあります。人間への温かい視線を持つ先生であってほしい」と語りました。

「3観点」はエリート志向の能力観

三木さんは、現行の学習指導要領について話をすすめ、学習指導要領に問答無用で従わせようという傾向が年々強まっていることにきびしい目を向けます。大阪の障害児学校の現場でも、「個別の指導計画」の目標・評価を3観点で記述するように迫られ、シラバスの作成・提出が義務化されています。

三木さんは、3観点（「知識・技能」「思考力・判断力」「学びに向かう力・人間性等」）について、「もともとPISA調査（OECDが進めている国際的な学力到達度調査）由来でエリート志向の能力観であり、知的障害のある子どもの教育を支える概念として、そのまま採用できないものです」と語り、「学習指導要領原理主義」とも言える学校現場の実情に警鐘を鳴らしました。

学習指導要領はほどほどに守る

「学習指導要領はあくまで大綱的基準」「大枠を定める基準であれば合憲だが、本来文科省が個別の教育内容について細かく指示すべきでない」との元文科省事務次官の前川喜平さんの発言を引きながら、三木さんはその本質を解明しました。国の最高裁判決も「学習指導要領は詳細に過ぎて、教師を強制するのに適切でない」という趣旨を述べていると紹介しました。

さらに学習指導要領のなかには、「『強行的規定』と『訓示的規定』が併存しているというのが教育法学の定説です」と述べました。「学習指導要領の大部分を占める『訓示的な部分』については、あくまで参考資料程度の扱いで十分です」と明快に語り、障害のある子どもの実態や願いから出発した教育を学校現場からすすめていくことの大切さを力説しました。

「楽しい授業」を子どもとともに

講演終了後の質疑応答で、参加者から「日々の『しんどさ』の中で教員という仕事の魅力が見えづらくなってきている」という声が出されました。三木さんは、「教師の仕事はつらいことの方が多いかもしれない」と前置きをしながら、職場の仲間とともにいい授業をつくることの大切さを強調しました。「子どもたちは授業と出会い、教材の価値を内面化し、自身を変革していきます。教師もこうした授業の本質的な喜びを知ることを通して、仕事のやりがいや魅力を再発見できるはずです」という三木さんの助言に、参加者は励まされました。

（裏面につづく）

大障教ホームページアドレス　http://fc06631220171211.web2.blks.jp/　Eメールアドレス：fushoukyou_1@mtb.biglobe.ne.jp

書記局のひとりごと

4月22日、毎年恒例の北河内ブロック（寝屋川、枚方、交野、四條畷、守口、思斉、光陽支援）分会合同の新歓教研がおこなわれた。

メイン企画「そうだ！先輩に聞こう！」は、初任2年目からのちょっと先輩の先生が、昨年一年を振り返って、初めての支援学校勤務で不安だったこと、失敗談、ちょっといい話などをお話するというもの。「子どもたちとどう関わったらいいのか」「校務分掌って何？」「右も左もわからない…」という4月から支援学校で勤める不安いっぱいの新米先生たちにとっては、ちょっと先輩の先生の経験談から語られる等身大の言葉は共感とともに大変励まされる。

一年前は同じように新米先生だったちょっと先輩の青年の報告は、昨年の振り返りとともに新年度の新たな決意を語る姿に実に頼もしさを感じる。また、私を含め参加するベテラン勢も、真っ直ぐな青年の姿に初心にかえるとともに毎年背筋がピンとなる。何より、同じ仕事に向き合う仲間同士で、不安や悩み・喜びや楽しさを共有できるひと時が私は大好きだ。

今年度もみんなで集まり語り合う中で、報告をしてくれた2年目の青年が「大阪の支援学校の何か力になれるなら」と組合の仲間に加わってくれ、参加者一同心から喜び合った。29日開催の大障教主催新歓教研で、自身も現場で長く組合員であった講師の三木裕和さん（立命館大学教授）は、「私たち一人ひとりは弱い存在」「弱いからこそつながり合う」と組合の魅力を語られた。新たな仲間の存在を力に、みんなでつながり合う「組合」を今年も大きくひろげていきたい。

不安だらけのスタートから数年、今、感じていること

北河内ブロック新歓教研「そうだ！先輩に聞こう！」

4月22日（土）に、ラポールひらかたにて、北河内ブロック分会（交野支援、四條畷校、寝屋川支援、枚方支援、守口支援、光陽支援、思斉支援）合同での新歓教研「そうだ！先輩に聞こう！」を行いました。6回目となる今年も、初任の方や初めて講師になられた方、支援学校が初めての方などが集まりました。6分会から19人が参加し、それぞれの経験談や意見交流などで学び合い、権利学習や組合の紹介も行いました。

まずは、毎年恒例の「ちょっと先輩の話」からスタートしました。初任2年目から4年目の3人の「ちょっと先輩」の先生から、教員を志したきっかけや、採用1年目を振り返ってのお話をしていただきました。「1年目は、自分の子どもへの関わり方が適切なのか、保護者とのやり取りも自分で大丈夫なのかと、不安だった」「分掌ってなに？PCの設定って？会議の言葉も、何もかもわからない状態だった」と、不安でいっぱいだったことがそれぞれから語られました。

分会をこえて参加者みんなで交流しました

同僚との関係については、「同期が話しやすくて救いだった」という方もいれば、「同じ初任でも講師経験のある同期で差を感じてしまい、気を使った」という方も。チームティーチングの中で、「まわりのやり方に対して自分なりにどうなのかな、という思いを持つこともある。まずは、そういうやり方もあるんやな、と学ぶ姿勢でいるが、葛藤もある」といった悩みも出されました。

仕事での悩みやストレスへの対処方法については、「休日にマラソンで発散」「帰宅後に家族とほっこり」といった個人的なリラックス方法を紹介し合う一方、「組合の青年部の集まりに参加し、色んな人と知り合えた。学校外の仲間に悩みを話せたことがよかった」と、組合でのつながりに支えられているという経験談も話されました。

数年の経験を重ねて、「1年目は先輩についていったら何とかなったが、今は自分が主体となることが増えた。自分の考えを持って具体的に先輩に相談するようにしている。また、生徒の言葉を掘り下げて聞き取り、信頼関係を作ることを大切にしている」「1年目は何がわからないのかもわからず、自分のことで毎日精一杯だった。今は、同僚との指導方法の違いに葛藤することも出てきて、子どものことで悩めるようになったと思う。子どもからの言葉で、まったがんばろうと思える」「職員室で他のクラスの子どものことも先生たちから話を聞けて、成長を感じられるのがうれしい。今年は、後輩が入って来たのでもっと自分から動いていきたい」といった、教員としてのやりがいや前向きな思いが語られました。

参加者からの意見交流では、「ちょっと先輩」が、1年目の時に一緒に働いていた、さらに先輩の先生から「初任の頃と比べて、経験を積んで自信がついたんだと感じた」といった感想や、「初任から数年でこんなにいろんなことを考えているのかと驚いた。自分たちが初任の頃に比べて気晴らしがしにくい時代ではあるけれど、日々のことを笑い合い、時に笑い飛ばす、同僚とのつながりが力になる」「指導方法の違いは自分も悩む。子どもの実態をしっかり捉えるためには、発達について知ることが大切」などの、共感の声やアドバイスが寄せられました。

参加した新転任の先生からは「今、不安に思っていることと、同じ気持ちだった方々がいるとわかって安心した」「明日から少しチャレンジしてみようかなと思うことがいくつかあり、自分なりにがんばっていこうと思った」「支援学校の先生方がどういうことを大切にして日々仕事されているのかがよく分かった」といった感想が寄せられました。

予定していた時間いっぱいまで、参加者それぞれが質問や感想などを活発に発言し、学び合うことができました。初任者だけでなく、経験を重ねた参加者にとっても、明日からまたみんなでがんばっていこうと、元気が出る教研でした。

（枚方支援分会　林　陽子）

（表面からのつづき）

大障教　新転任者歓迎教研　参加者の感想

○「いろんな教員がいていい」という話が私にはひびきました。まさに（私は）すぐに判断できない、テキパキタイプじゃない…と悩むことも多く、前任校の学年の人間関係でもすごく悩んできました。でもスモールステップで歩む子どもたちに寄り添う心は学年の誰にも負けないぞ、そこだけは忘れないでいようとがんばってきたつもりです。三木先生のお話を聞いて、私は決して優秀な教師ではないけど、私なりにがんばっていこうと思えました。

○やっぱり支援教育っていいなぁと感じることができた講演でした。支援教育の現在と過去があって今がある というお話をきけて、いろいろ考えるきっかけになりました。日々しんどいこと、つらいこともあるけれど、子どもたちとのキラッと輝く瞬間やうまくいったなと思える授業実践を大切に目の前にいる子どもたちのために頑張っていきたいと思います。

○私は一度「教師に向いていない」と考えあきらめた瞬間がありました。しかし、今日の講演を聞き本当にあきらめなくて良かったと思いました。救われました。

○「自分のこんなところを直さなくちゃ」と感じていた部分を「それでいいんだ」と思え、気持ちが軽くなりました。「あー子どもといる時間が一番やなぁ」としみじみ感じるくらい他の業務の圧迫を受けていました。でも、「ぼちぼちやっていこ～う」と思えました。

三木さんの講演に聞き入る参加者